

「佛光寺了源の首」

津田徹英（東京文化財研所）

空性房了源（1295～1336）は、教学面で本願寺覚如の長男・存覚に指導を仰ぎつつ門徒経営に長け、一代で鎌倉から京都進出を果たし、今日に及ぶ佛光寺門徒の礎を確固たるものにした。建武三年（1336）正月、42歳で不慮の死を迎えるが、その等身の肖像彫刻（以下、了源像、像高81.8cm）が、本山佛光寺（京都市下京区）御影堂において宗祖・親鸞像の傍らに安置され尊崇を集める。制作年代は、像内に納められた像主遺骨の包み紙に見える康永三年（1344）八月の年記が納入時を示唆するようであり、像の作風を考慮するならば、年記が示す時期をさほど隔てない頃とみるのが穏当である。中世の真宗肖像彫刻の棹尾を飾るに相応しい本格作であることは言を俟たない。ただし、没後8年を経ての造像であったことを思えば、生前の相貌の再現はどのようにしてなされたのであろうか。

発表者が着目するのは、像内に了源の遺骨とともに、素木に墨の細線で眉を描き、瞳を点じた了源の木造小首（頂から顎までの長7.1cm）を納入することである。その小首は了源像よりも風貌において写実的であり、制作は了源像を遡ると考える。見過ごせないのは右額上から眉にかけて、えぐったようなキズが認められることで、伝世の過程で打損により生じたとは考え難い。加えて、両頬付近を不自然に薄墨で汚すことも気になるところである。ここで想起されるのは、佛光寺の家譜『渋谷歴世略伝』などが伊賀国七里峠（三重と滋賀の県境、現在の伊賀市丸柱地先の通称「桜峠」）での刺客による惨殺を伝えることである。

ところで、今回、了源像の調査に際して、本山佛光寺当局の格別のはからいを得て、像主遺骨（焼骨）についても拝見することができた。その際、注目されたのは頭蓋から眼窩にかけての骨片の表面に一条の刻線があり、刻線中に鉄の赤錆が認められたことである。それは明らかに刀傷であり、その箇所は小首のえぐられたキズと照応し、致命傷となったことを窺わせるに十分である。なかば伝説化した670数年前の惨劇が事実として蘇る。両頬を汚したように付着する薄墨も血糊を再現したようであり、とすれば、この小首の制作は了源の末期に及んでの直後（茶毘に付されるまで）か、または、その記憶があるうちと考えるのが自然であろう。了源のデスマスクとみなし得るこの小首が制作された意図について今となっては明らかにすることは難しい。しかしながら、これが了源像内に像主焼骨と一緒に納められていたことを思えば、この小首こそ没後に了源像を制作するに当たって、風貌再現の範となったように考えるのである。中世肖像彫刻において生前の制作になる寿像を別にするとき、没後の造像に際して像主の相貌の再現がどのようになされたかを明らかにし得る例は稀である。その点においても本像の存在は極めて貴重であろう。

その了源像の右眉上には、縦に打ち傷が認められる。偶然、小首と同じところに生じたとは考え難い。惨殺の記憶を肖像に留めることは一見奇異なことのようにも思われる。しかしながら佛光寺門徒にあっては、かの了源惨殺が念仏弘教のための殉教と捉えられていた節があり、一端は上述の『渋谷歴世略伝』に読み取ることができる。とすれば、それは殉教尊崇における一種の聖痕となり得たことが検討されなければならないであろう。